

きょうを 読む

「すなわち自由主義は吾輩の単一なる神にありざるなり、吾輩は或る点について自由主義を取るものなり、ゆえに吾輩は自由主義もとよりこれに味方すべし、然れども吾輩の眼中には、干渉主義もあり、また進歩主義もあり保守主義もあり、平民主義もあり貴族主義もあり、おのおの適當の点に据え置きて吾輩は社交および政治の問題を裁断すべし」

明治言論界の巨峰であった陸羯南が著した『近時政論考』の最終部には、このような記述がある。陸は、明治前期の藩閥政治や官僚制度に激しい批判を加えつつ、明治政府主

陸羯南の言論を振り返る

導の性急な西洋化に疑義を唱える一方で、日本の「伝統」を擁護した。故に、陸の論調は「国民主義」と呼ばれ、陸自身は現在では「明治ナショナリストの典型」として位置付けられている。

しかし、陸の「国民主義」それ自体は、ナショナリズム状態に至り、自ら錯誤を犯している。

の人人の眼には、無定見、無ても気付かない」愚昧を認識節操と映るものであるかもししていた。

陸にとつて大事であったのは、日本国民の隆昌を謀るの諸々の主義主張には、どのよなものであれ真理を含まないうちの単一の主義主張に耽溺つものはないが故に、「近時政論考」の記述は、その主義主張を極点まで追うことによつて他と相容れないし、自ら錯誤を犯している。

柔軟で多様な「公論」

とリベラリズムの融合を目指すものであった。実際、陸が主宰した新聞『日本』には、三宅雪嶺・志賀重昂・長谷川如是閑・古島一雄といった人材が集つたけれども、陸の「国民主義」におけるナショナリズムの側面を継いだのが三宅や志賀であり、そのリベラリズムの側面を継いだのが長谷川であったということになる。

櫻田 淳



さくらだ・じゅん 政治学者・東洋学園大 学准教授。一九六五年宮城真生まれ。八戸高校、北大卒、東大大学院法学政治学研究所修了。政治、外交を中心に論陣を張る。著書に「国家への意志」（中公叢書）など。

幕末・安政年間に弘前藩医の家に生まれた陸は、日本が帝国内政の渦の中に巻き込まれた明治前半の時代の空気を吸いながら、言論活動を続けた。陸が生きた時代の雰囲気は、「冷戦の終結」以後、「グローバル化」の潮流が世界を席卷している平成の

立の図式に囚われた議論が、依然として何の術いもなく展開されている。陸にしてみれば、こうした硬直した議論こそが、「一つの主義主張を極点まで追うことによつて他と相容れない状態に至り、自ら錯誤を犯しても気付かない」議論に他ならなかったであろう。

御代の雰囲気とは何と似通っていることであろうか。

振り返れば、「ベルリンの壁の崩壊」という世界史上の一大変動から既に十八年、日本の政界の構図を規定してきた「五五年体制」の崩壊から十四年近くの歳月を経た今、「グローバル化」の奔流の中にある日本の今後を展望する上でも、柔軟にして多様な「公論」が要請されているはずである。

にもかわかわらず、現在の日本では、冷戦期の保革二項対

陸は、薩長土肥四藩出身者が幅を利かせた明治期の社会体制の中では、明らかに傍流の存在であった。しかし、その傍流の存在が、後の時代の言論界への種を蒔いた。戦後を代表する碩学・言論家であった丸山真男も、陸の言論を評価した。

冷戦終結以後の「グローバル化」の進展への適応は、小泉純一郎前内閣期に「構造改革」の名の下に劇的に進められたけれども、その劇的な適応の帰結として、様々な「格差」の浮上が指摘され

ている。十九世紀後半の帝国主義潮流に適應するために明治政府が断行した「富国強兵」路線もまた、日本の諸々の制度を根底から築き直す「構造改革」の趣を持っていたけれども、陸はその明治期の「構造改革」を前にして誠に豊饒な言論を展開したのである。

とすれば、平成の御代においても、陸が「日本国民の隆昌を謀る」という一点に拠つて展開した言論の意義は、再び確認されるべきものかもしれない。奥州の地は、再び陸に類する人材を輩出できるであろうか。

あすを 考える

「東奥日報社提供」この画像は当該ページに限って東奥日報社が利用を許諾したものです。